

### 「古典や歴史に学ぶ」

上に立つ者は、まずわが身を正せというのだが、かつての日本の先人たちは多かれ少なかれその意識を持っていた。

彼らの言動にそれなりの美学が感じられるのはそのためでもあろう。

これは何も一部の著名なリーダーに限ったことではなく、地方の名もなきリーダーにも、そういう人物が大勢いたのである。

では、先人たちはどこでそれを学んだのか？

江戸時代も後半になると、ほとんどの藩が自前の藩校をつくって人材の育成に当たった。

そこで何を教え、何を学んだのかといえば、中心の教科は1校の例外もなく、中国古典であり、

中でも儒学が基本であった。

また当時、各地に私塾が設けられ、その数二千以上にも達したといわれているが、大阪の適塾などわずかな例外を除いて、中心の教科はやはり儒学であり、中国古典であった。

中国古典の核心は、「脩己治人」の学にある。

「己を修め、人を治む」となる。

「人を治む」とは人々を統治すること、そういう立場を目指そうとする者はまず「己を修む」必要があるのだという。

「己を修む」とは、上に立つ人間としてふさわしいような中身を身に着けるように、能力と人格の両面にわたって自分を磨くことである。

むしろ「まずわが身を正せ」という教えも、強い要請として含まれていることは言うまでもない。

また、歴史書であるが、これもかつての藩校や私塾においては必須の教科であった。

例えば、「十八史略」「春秋左氏伝」「史記」「資治通鑑」といったところであるが、これら中国の史書の特徴は人間を中心に書いていることである。

当然、さまざまなリーダーが登場してくるので、読む者にとってはリーダー学の格好のテキストになっていると言ってよい。

先人たちは、これらの古典や歴史書を紐解くことによって、説得力のあるリーダーを目指すためには、まずわが身を正さなければならないことを、いやというほど実感させられてきたのである。

今、その伝統が途絶えようとしている。

それに代わるテキストが何かあればまだ救われるのだが、それもない。

説得力のあるリーダーが出てこない背景にはそういう事情もあるように思われる。

### <コメント>

#### 四書五経はご存知ですか？

四書は「論語」「大学」「中庸」「孟子」

五経は「易経」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」

先人たちは、これがテキストでした。

そして大切にしていたのが歴史書です。

一番有名なものが「史記」

歴史を学ぶ方法は2つあります。

人物や国を中心に記述するのが「紀伝体」

起こった出来事を年代順に記していく方法を「編年体」といいます。

歴史を学んで、どちらが面白いのか？ 学びになるのか？

人物にスポットを当てると、主人公が何に悩み、何故そのような決断をしたのか？ 想像することができます。

そして、もし自分だったらどうしたか？ 何故そのような決断する判断軸は？

いろいろと自分自身の価値観が問われることになります。

日本の歴史教育はどこで間違ったのか？

テストのための勉強なら、正解がある「編年体」が教える側は便利ですね。